

私立大学図書館協会 2024-2025 年度研究助成

『源氏物語』 鎌倉期写本の
書誌的調査及び解題目録

天理大学附属天理図書館

高橋 諒

1. はじめに

(1) 研究目的

『源氏物語』は日本古典文学史上の最高傑作とも評される作品である。その諸本に平安期の伝本はなく鎌倉期以降のものが現存している。主要な伝本は池田亀鑑編『源氏物語事典下巻』（東京堂出版、1960年）の「諸本解題」（大津有一執筆）にまとめられているが、簡潔な記述に留まり書誌的調査が十分になされたとは言いがたい。また、平安期の『源氏物語』がいかなる本文であったかを究明する上で、鎌倉期写本における本文の分析が不可欠である。しかし、平安期に最も近い鎌倉初期の写本でさえ、本文の実態は詳らかではない現状にある。

「諸本解題」から知られる鎌倉期写本のうち、弊館所蔵の伝本については弊館において詳細な調査がなされ、その成果が『天理図書館稀書目録和漢書之部第一～五』（1940-2010年）にまとめられている。しかし、前田育徳会尊経閣文庫や静嘉堂文庫など、他館所蔵の『源氏物語』伝本についてはいまだ詳らかでないものもあるため、改めて調査・分析を行い書誌的情報の更新や本文の実態を明らかにする必要がある。

他方、目録の見地からは、総合目録における和漢古書の書誌記述のあり方についていまだ検討の余地を残している。岡嶋偉久子「日本目録規則（NCR）1987年版改訂2版第2・3章改訂案について」（日本図書館協会目録委員会編『継続資料と和古書・漢籍の組織化：日本目録規則（NCR）1987年版改訂2版第13章及び第2・3章の改訂』日本図書館協会、2005年）、同「総合目録における和漢古書書誌記述の考察—NACSIS-CAT（NII）及びNCRでの取り扱いを踏まえて—」（『大学図書館研究』第74号、2005年）では和漢古書の書誌記述の実態や目録類の現状から記述の困難さが指摘されており、この問題について今後さらなる検討・考察の進展が求められる。

こうした現状を踏まえて、本研究では『源氏物語』鎌倉期写本を対象とした書誌的調査及び解題目録の作成を行い、和漢古書の書誌記述について検討・考察を加えることを目的とする。時代・ジャンルを問わず和漢の古典籍を数多く所蔵している弊館において、書誌記述に関する検討・考察は不可欠である。また、弊館においてこれまで培ってきた和漢古書に関する専門的技術や蓄積に基づいてこそ可能な研究であると言える。本研究の成果は大学図書館における和漢古書の目録作成においても大いに寄与することが期待される。

(2) 研究計画とその方法

本研究の目的を踏まえて、(a)『源氏物語』鎌倉期写本の書誌的調査、(b)紙焼写真及びデジタル画像の収集、(c)各伝本間における本文の比較検討、(d)解題目録の作成、(e)書誌記述の検討・考察、を行う。

2024年度は、「諸本解題」を基に、『源氏物語』鎌倉期写本の各現蔵先について、大学図書館や個人文庫等の所蔵機関の目録・OPAC等を活用して一覧のリストを作成する。リストの各伝本の現蔵先が判明した上で、(a)及び(b)を行う。(a)については1伝本につき基本的には複数日をかけて行う。並行して、(b)で得たデータを基に、池田亀鑑『源氏物語大成』（普及版、中央公論社、1984-1985年）を活用して(c)を行う。以上の情報を統合して(d)を行う。

2025年度は、昨年度作成したリストを基にして、昨年度行えなかった伝本について (a) と (b) を行う。並行して、(b) で得たデータを基に、『源氏物語大成』等を活用して (c) を行う。以上の情報を統合して (d) を行う。この一連の (a) ～ (d) によって得られた知見を基に、最後に (e) に取り組む。

上述した計画に基づき、(a) ～ (e) の一連の方法で行う。(a) については、現存する『源氏物語』鎌倉期写本の現蔵先を確認した上で、書誌的調査を行う。鎌倉期写本は零巻あるいは数巻しか残存していない場合もあるため、伝本の残存状況に基づいて、調査にかける日数は柔軟に対応させる。

同時に (b) も並行して行う。現蔵先を確認した上で、その資料複写を申請する。既に刊行物としてあるものやデジタル画像として公開されているものについてはそれを利用する。

(c) については (b) で複写物が入手でき次第、『源氏物語大成』や加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』(風間書房、2001年)、伊藤鉄也『源氏物語別本集成』(おうふう、1989-2002年)等の校本類を活用して本文の比較検討を行い、各伝本の性格を分析する。今後の本文研究への活用を鑑みて、必要に応じて、翻刻を行い本文データとして残しておく。

以上の (a) ～ (c) で得られた情報を基に、(d) を行う。目録については、後述する (e) での検討・考察を行うために、目録データを作成する。

最後に、(e) を行う。従来指摘されてきた書誌記述上の問題点を踏まえた上で、作成した解題目録を基にしつつ、書誌記述のあり方について検討・考察を加え、和漢古書の目録作成における従来の問題点への解決を図る道筋を付ける。

ただし、現蔵先の意向によって調査が認められない場合も考えられる。そのため、本研究課題においては、書誌的調査が可能となった対象を中心に目録解題を作成する。

2. 目録解題

《凡例》

一、本目録解題は、現在までに確認されている『源氏物語』鎌倉期写本のうち、本研究課題で調査を行った伝本を収録したものである。

一、本目録解題の掲載順序は、所蔵機関の五十音順とする。次に請求記号順に配列する。

一、本目録解題は、目録の後に解題を記述する。

一、書名は、原則として巻頭また目首等のいわゆる内題に拠るが、併せて題簽あるいは外題その他を参照して定める。それらを全て欠く場合には〔 〕を付して書名を与える。

一、著编者及び筆者等の人名は、当該現本の表示形を用いることを原則とし、適宜通行名を付記する。

一、目録記入はおおよそ次の事項をその順序で記述する。各事項の別は、改行及び初行行頭の低一格をもって表す。

標目部 書名、刊写の別、巻数、著编者名、書写年、書写者、冊数。残欠本の残存巻数については巻数に「存」として残存の巻数を明示し、零本扱いの図書は残存巻数を示さない。

転写部 書名、著编者、及び書写年等の関連情報として、巻頭、目首、題簽あるいは外

題、及び奥書等を転写する。転写（「」）にあたっては忠実を旨とし、使用の文字・誤字・衍字等もそのままを原則とする。尚、不読箇所は□、虫損等による判読不能箇所は■をもって示し、改行は／をもって示す。割書は〈 〉で表す。

形態記述部及び内容分析 装訂、表紙、寸法、用紙、字高、毎半葉の行数等、形態及び書写面について記述する。続いて各冊及び各巻毎に丁数を表示する。

注記 必要に応じて当該現本の内容及び本文系統、また欠巻・欠丁等の状況、本奥書、識語また書入、及び伝来に関わる極書・印記等の特記的事項を記述する。

一、解題は《 》をもって示し、当該現本の特記的事項を記述する。

【1】〔源氏物語〕（存 15 巻）

鹿児島大学附属図書館所蔵。請求記号：玉里//天の部 213 部//1361。〔鎌倉後期〕写。15 冊。

題籤中央金揉箔散紙無記（縦 11.5×横 2.8cm）。

綴葉装。縹色表紙（縦 16.1×横 15.6cm）（第 8-9、11-14 冊は改装後補深緑色地葡萄海老文織出表紙）。見返銀切箔散。本文行数：10 行（第 2 冊は 10-12 行、第 4 冊は 9-10 行）。墨付丁数：[1]：須磨：77 丁（全 7 括各 6 紙）、[2]：賢木：65 丁（全 6 括。[1]：5 紙、[2]-[6]：6 紙）、[3]：夕霧：105 丁（全 7 括。[1]：7 紙、[2]-[4]：9 紙、[5]：7 紙、[6]：6 紙、[7]：5 紙）、[4]：若菜下：172 丁（全 11 括。[1]：5 紙、[2]：10 紙、[3]-[9]：9 紙、[10]：5 紙、[11]：6 紙）、[5]：藤裏葉：34 丁（全 3 括。[1]：6 紙、[2]：9 紙、[3]：6 紙）、[6]：野分：27 丁（全 3 括。[1]：6 紙、[2]：6 紙、[3]：3 紙）、[7]：玉鬘：56 丁（全 4 括。[1]：5 紙、[2]：8 紙、[3]：9 紙、[4]：6 紙）、[8]：匂宮：22 丁（全 2 括。[1]：5 紙、[2]：6 紙）、[9]：紅梅：22 丁（全 2 括。[1]：6 紙、[2]：5 紙）、[10]：松風：27 丁（全 2 括。[1]：6 紙、[2]：9 紙）、[11]：花宴：18 丁（全 3 括各 4 紙）、[12]：空蟬：18 丁（全 3 括各 4 紙）、[13]：関屋：8 丁（全 2 括。[1]：5 紙、[2]：2 紙）、[14]：絵合：28 丁（全 3 括。[1]：6 紙、[2]：6 紙、[3]：5 紙）、[15]：初音：20 丁（全 2 括。[1]：6 紙、[2]：9 紙）。処々に本文同筆にて異本注記・見せ消ち・補入を施す。朱句読点あり。擦消あり。

墨付枚数を示した 1 紙を付す。極札（表）「（巻名）〈筆者名/初行〉（琴山）」（打曇紙）。

《解題》

鹿児島大学附属図書館が所蔵する「玉里文庫本」は、薩摩藩主・島津家の分家である玉里島津家に伝来した写本の総称である。本群には、鎌倉期書写の「古筆源氏物語」と、室町期に整えられた揃い本「各筆源氏物語」の二種が存し、いずれも公家の名門・近衛家からもたらされた由緒を有している。

該本は前者にあたり、「玉里文庫本古筆源氏物語」等と呼ばれ、鎌倉後期書写の 15 帖からなる残欠本である。本文は巻ごとに藤原定家が校訂した定家本（青表紙本）系統、源光行・親行父子が校訂した河内本系統、そのいずれにも属さない別本群が混在する混合本の様相を呈している。中でも「須磨」は別本（保坂本に近い本文）として、また「夕霧」は阿仏尼筆と伝えられる定家本（青表紙本）系統として注目される。今井源衛は、近衛家本や保坂本と並ぶ重要写本と述べている。

『源氏物語大成』には未採用ながら、近年の『新編日本古典文学全集』等において一部の巻が底本や校異に採用されており、後者の「各筆源氏物語」と併せて、近世大名家

における源氏物語受容と伝承の実態を物語る貴重な資料である。

【2】〔源氏物語〕（存4巻）

国文学研究資料館所蔵。請求記号：88-22-1～4。〔鎌倉中期〕写。4冊。

外題中央「わかむらさき（ゑあはせ・■■・ふ〔ち〕はかま）」。

綴葉装。本文共表紙（縦17.8×横17.0cm）。見返本文共紙。用紙鳥の子。本文行数10行。墨付丁数：第1冊：65丁（全7括。[1]：5紙、[2]：5紙、[3]：5紙、[4]：5紙、[5]：5紙、[6]：5紙、[7]：4紙）、第2冊：2丁（存1括2紙。）、第3冊：24丁（全4括。[1]：3紙、[2]：4紙、[3]：5紙、[4]：2紙）、第4冊：13丁（全3括。[1]：3紙、[2]：2紙、[3]：3紙）。墨筆にて見せ消ち・補入等の傍記あり（冊により本文同筆・別筆の場合あり）。第1・3・4冊に朱合点あり。

第1・3冊に欠丁あり。包紙上書「古写本源氏物語零巻」。印記「国文学研究資料館」（朱陽長方）。

《解題》

該本は、国語学者・橋本進吉（1882-1945）が旧蔵した『源氏物語』の写本であり、現在は国文学研究資料館の所蔵に帰している。池田亀鑑『源氏物語大成 研究編』において「橋本博士蔵伝為家筆若紫巻」として紹介されたことで知られるが、実際には「若紫」のほか「絵合」「松風」「藤袴」の計四帖が伝存している。

各帖とも本文に欠落が多いものの、離れた巻序にありながら料紙及び形態が同一であることから、本来は五十四帖から成る揃い本であったと考えられている。書写年代は鎌倉中期と見られ、筆者については、池田亀鑑が当初の「不明」とする見解から、後に藤原為家筆へと翻したが、極札等の確証はなく、その根拠についてはなお慎重な検討を要する。

本文系統は極めて特異である。池田は「若紫」の本文について、「最初の方は青表紙本で、次第に河内本に近づいていくが、ところどころに青表紙本でも河内本でもない表現が混じる」という状況であり、「全体としては別本に分類するしかない」としている。このため、別本群に分類されている。

該本は、かつて池田の調査対象となりながらも『校異源氏物語』及び『大成校異編』には不採用であったが、近年の『源氏物語別本集成続』においては写本記号「橋」として「若紫」「松風」が採録されており、源氏物語本文の多様性と変遷を解明する上で不可欠な資料として再評価が進んでいる。

【3】〔源氏物語濡標巻〕

静嘉堂文庫所蔵。請求記号：18696-1-105-8。〔鎌倉前期〕写。1冊。

外題中央「みをつくし」。

綴葉装。海松色地金泥霞松波濤草花画表紙（縦16.9×横15.4cm）。見返海松色地金泥画金揉箔散。用紙楮紙。本文行数10行。墨付丁数：42丁（全5括。[1]：2紙、[2]：3紙、[3]：6紙、[4]：6紙、[5]：4紙）。

朱書「きこえすきはしての前/間式十三行脱こは書あやまりなるへし」との紙箋を見返と前遊紙の間に挟み込み、「やつかへひと」と記せる丁と「かうこそ思の…」と記せ

る丁との間に朱書「此間四十三行脱湖月抄にて/補ふ」との紙箋挟み込む。布包に「源氏みをつくし家隆卿筆明治八年乙亥三月廿五日/青木信寅」と墨書あり。「家隆卿ミをつくし一冊/三藐院信尹公表紙書付」と記せる包紙あり。中に「極札」と記せる包紙あり。極札(表)「家隆卿さやかに表紙書付/近衛三藐院信尹ミをつくし一冊(墨印「琴山」)」、(裏)「源氏ミをつくし六半本(戊寅八)(楯円黒印)」。箱(蓋表)題簽中央「みをつくし」〔家隆卿〕、右下に「第十二號/家隆卿/みをつくし」と記せる墨書紙片貼付。印記「静嘉堂穆蔵」(朱陽長方双枠)。

《解題》

本帖は、鎌倉前期の書写と推定される『源氏物語』「澹標」の零本である。筆者は不詳ながら、幕末から明治期にかけての蔵書家・青木信寅の鑑定により、新古今時代の代表的歌人である藤原家隆(1158-1237)の筆と伝えられてきた。

本文は、定家本(青表紙本)の系統に属する。定家と並び称される家隆の筆と伝称される該本の存在は、歌道の双璧をなした両者の関係性をも想起させるものであり、古筆鑑定史上においても興味深い。

『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』において、略号「家」として採用されている。青表紙本の本文を検討する際の重要な対校本の一。

【4】〔源氏物語竹河卷〕

静嘉堂文庫所蔵。請求記号：18674-1-105-1。〔鎌倉初期〕写。1冊。

綴葉装。改装後補深緑色地蓮華唐草模様織出表紙(縦17.1×横15.5cm)。見返金布目紙銀切箔揉箔野毛散。用紙鳥の子雲母摺。本文行数12行。墨付丁数：39丁(全3括。[1]：10紙、[2]：9紙、[3]：5紙)。

前遊紙1丁裏に「にはふ兵部卿の/ならひの一/たけかは」とあり。後遊紙1丁表に「源氏竹川の六半本一冊者/西行法師之真蹟也世間流布之/筆跡字形とハ相違迄云ニ此数筆/不見之輩者可謂不審迄壯年之筆蹟/就中見事也御物同本一冊有之/拝見之砌写之此本ニ副置後證之為迄/なす端之一枚三くたり十六字は二條家/為相卿之筆御物一冊之外題も為相卿/也了佐十四代古筆了仲(墨印)」とあり。包紙上書「旧幕府蔵/すゑつむはなのうつし一枚」。包紙の中に極め1紙(縦18.8×横42.6cm)あり。「大日本史隱逸列傳」と記せる西行の事績を記述せる黄紙を見返と前遊紙の間に挟み込む。箱蓋表に上部剥落題簽貼付、同右下に「第十八號/西行法師/源氏竹川卷」と記せる墨書紙片貼付。印記「静嘉堂穆蔵」(朱陽長方双枠)。

《解題》

本帖は、鎌倉初期の書写と推定される『源氏物語』「竹河」の零本である。筆者は未詳であるが、江戸期中期の古筆鑑定家であり、了佐14代の古筆了仲の極書によれば、平安期末期の歌僧・西行法師が書写した筆跡であると伝えられる。

本文は、独自の本文を保持する別本群に分類される。『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』において、略号「西」として採用されている。

【5】〔源氏物語手習卷〕

静嘉堂文庫所蔵。請求記号：18679-1-105-2。〔鎌倉後期〕写。1冊。

綴葉装。改装後補柳色地菱繫模様織出表紙（縦 15.9×横 15.2cm）。見返金布目紙金切箔揉箔銀砂子散。用紙楮打紙雲母摺。本文行数 12 行。墨付丁数：79 丁（全 4 括。[1]：12 紙、[2]：12 紙、[3]：12 紙、[4]：9 紙）。間々墨筆にて補入等の書入、朱筆にて合点・句読点を施す（朱墨は本文同筆）。

「極」と墨書せる包紙（「明治十一年一月廿日信寅」と墨書）あり。打曇紙に「二條為氏卿真蹟〈源氏手習卷ノ卷/六つ半/そのことよかはに〉」と墨書せる極札あり。前遊紙 1 丁表に「冷泉殿〈為相卿/さか木一冊（黒印）〉」とある極札貼付。箱蓋表に「阿佛尼筆〈源氏〉手習卷」と題簽あり（「阿佛尼」の箇所を傍線を付し、右傍に「為氏卿」と墨書）、同蓋表右下に「第三十六號/二條為氏/〈源氏〉手習卷」と記せる紙片貼付。印記「静嘉堂穆蔵」（朱陽長方双杵）。

《解題》

本帖は、鎌倉後期の書写と推定される『源氏物語』「手習」の零本である。筆者は未詳であるが、青木信寅の鑑定により、二条家の祖である二条為氏（1222-1286）の筆と伝えられる。

本文は、定家本（青表紙本）系統に属する。二条派の祖である為氏の筆と伝えられる該本は、定家以来の正統な本文がどのように受け継がれ、家学としての権威を確立していったかを物語っている。

『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』において、略号「二」として採用され、定家本の本文を検討する際の対校本の一。

【6】〔源氏物語初音卷〕

静嘉堂文庫所蔵。請求記号：18680-1-105-3。〔鎌倉初期〕写。1 冊。

綴葉装。改装後補織出表紙（縦 18.4×横 17.8cm）。見返金銀切箔散。用紙楮紙雲母摺。本文行数 12 行。墨付丁数：14 丁（全 3 括。[1]：5 紙、[2]：3 紙、[3]：3 紙）。墨筆にて本文を右傍に書入、朱筆にて注記等の書入を施す（朱墨は本文同筆）。

前遊紙 1 丁表に「慈鎮和尚〈初音之卷/としたちかへる〉一冊（黒印「琴山」）」と記せる極札貼付、同二丁表に「むらさきの上はかためきいる事/あかしの上より中宮ハわかなまいる事/六条院御方々ハわたり給事/臨時客事/おとこ踏哥事」と目録（内容注記）を記す。箱書（蓋表）「慈鎮和尚筆/初音之卷一冊/了音極/とし音かへる」、同蓋表右下に「第■■/慈鎮和尚/初音卷」と記せる墨書紙片貼付。「代付〈慈鎮和尚筆/初音の巻〉」と記せる包紙に極めあり。極めには「慈鎮和尚筆/初音之卷一冊/代金式枚/〈丁酉〉仲春中旬古筆了音（黒印「琴山」）」とあり。印記「静嘉堂穆蔵」（朱陽長方双杵）。

《解題》

本帖は、鎌倉初期の書写と推定される『源氏物語』「初音」の零本である。筆者は未詳であるが、江戸期の古筆鑑定家・古筆了音の鑑定により、天台座主を務めた高僧であり『愚管抄』の著者としても知られる慈鎮（慈円）（1155-1225）の筆と伝えられる。

該本の大きな特徴は、巻頭に独自の「内容目録」を具備している点にある。「むらさきの上はがためまいる事」や「臨時客事」といった、各場面の要所を記した五項目の目録は、中世における読者が物語の構成をどのように把握し、享受していたかを知る上で興味深い。

本文は、定家本（青表紙本）の系統に属する。『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』において、略号「慈」として採用される。

【7】〔源氏物語賢木卷〕

静嘉堂文庫所蔵。請求記号：18681-1-105-3。〔鎌倉後期〕写。1冊。

綴葉装。改装後補深緑色地花模様織出表紙（縦17.4×横15.7cm）。見返金布目紙銀切箔揉箔砂子散。用紙楮打紙雲母摺。本文行数11行。墨付丁数：64丁（全5括。[1]：9紙、[2]：9紙、[3]：9紙、[4]：6紙、[5]：3紙）。間々墨筆にて補入等の書入、朱筆にて朱点を施す（朱墨は本文同筆）。

前遊紙1丁表に「冷泉殿〈為相卿/さか木一冊（黒印）〉」とある極札貼付。箱書：内箱（蓋表）金泥筆「さか木冷泉為相卿毫」。外箱（蓋表）右肩墨書定家様「冷泉為相卿毫/歌書一冊」。外箱底に「哥書さかき/極札別箱入」と記せる墨書紙片貼及び「第三十五號/冷泉為相/〈源氏〉さか木」と記せる墨書紙片貼付。印記「静嘉堂穆蔵」（朱陽長方双枠）。

《解題》

本帖は、鎌倉後期に書写されたと推定される『源氏物語』「賢木」の零本である。筆者は未詳であるが、古筆鑑定の極札によれば、冷泉家の祖であり、鎌倉の地で和歌・古典の振興に尽力した冷泉為相（1263-1328）の筆と伝称されてきた。

本文系統は、別本群に分類される。鎌倉期において、定家本（青表紙本）や河内本といった二大系統には見られない古態本文を宿している点は、本文の変遷を考える上で示唆に富む。『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』には、略号「相」として採用されている。

【8】〔源氏物語浮舟卷〕

静嘉堂文庫所蔵。請求記号：18704-1-105-9。〔鎌倉中期〕写。1冊。

綴葉装。改装後補蓮花・花菱模様金欄表紙（縦15.9×横15.5cm）。見返金切箔野毛銀揉箔銀砂子散。本文行数9行。墨付丁数：112丁（全6括各10紙）。墨筆にて補入等の書入を施し、朱合点・朱句読点を施す（朱墨は本文同筆）。抹消・擦消箇所あり。

箱書（蓋表）中央「源氏ものかたり〈うきふね〉」。蓋表に「〔第四十二〕號/為家/源氏/浮舟」と記せる紙片貼付。

《解題》

本帖は、鎌倉中期の書写と推定される『源氏物語』「浮舟」の零本である。筆者は、藤原定家の息であり御子左家の正統を継いだ藤原為家（1198-1275）の筆と言われている。

書誌的特徴として、本文行数に変化が見られる。当初は一面9行の端整な形式で書き進められているが、第18丁裏に至って一面11行へと転じており、書写の過程における形態の変遷を今に伝えている。

本文は、河内本系統に属する。『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』では、旧蔵者の静嘉堂文庫にちなみ、「静」として採用されている。河内本の本文を検討する際の有力な対校本の一。

【9】〔源氏物語〕（存5巻）

静嘉堂文庫所蔵。請求記号：18712-5-105-12。5冊。〔鎌倉中期〕写。

題簽中央金泥画「よもきふ〈身をつくし/ならひ一〉」「ほたる〈玉かつら/並二〉」「〈廿二〉横ふゑ」「〈廿五〉まほろし」「〈卅一〉さわらひ」（縦7.9×横5.1cm）。

綴葉装。砥粉色地銀切箔野毛砂子散雲母摺表紙（縦16.5×横15.7cm）。用紙雲母摺。本文行数9行。墨付丁数：第1冊：27丁（全3括。[1]：4紙、[2]：6紙、[3]：6紙）、第2冊：33丁（全4括。[1]：4紙、[2]：5紙、[3]：5紙、[4]：4紙）、第3冊：29丁（全4括。[1]：3紙、[2]：5紙、[3]：5紙、[4]：3紙）、第4冊：35丁（全3括。[1]：6紙、[2]：9紙、[3]：6紙）、第5冊：30丁（全4括。[1]：3紙、[2]：6紙、[3]：6紙、[4]：2紙）。朱合点・朱句読点あり。本文同筆にて見せ消ち・補入等の傍記あり。擦消・塗抹による抹消あり。

『源氏物語』蓬生・螢・横笛・幻・早蕨巻を存す。極書3紙を付す。（第1紙）「一源氏物語之内/はゞきぎの巻壺巻/一源氏物語之内/朝かほの巻壺冊/石河茂為家卿正筆〈二而〉/御座候/二月廿七日」（縦16.9×横19.1cm）。（第2紙）「御手紙拝見仕候餘□□/御座候得友御成福□成/御勤弥重奉存候然者/為家卿之由二品為御見/被遊候様子別紙書付/進上仕候則返進仕候/宜鋪被珍遣可被下候已上」（縦16.7×横30.7cm）、同端裏に本文同筆にて「中嶋藤兵衛様古筆了延」とあり。他端裏に本文同筆にて「青木様古筆了件」と記せる極書1紙（縦15.8×横73.2cm）あり。箱書（蓋表）中央「源氏物語五冊」、（蓋裏）「為家卿〈箒木一卷/ひかる源氏なのミ事/しう（黒印「琴/山」）〉」と記せる極札貼付。印記「静嘉堂穆蔵」（朱陽長方双杵）。

《解題》

本帖は、鎌倉中期の書写と推定される『源氏物語』の古写本群である。筆者は藤原為家と伝えられ、もとは加賀藩前田家に一括して伝来した揃い本の一部であった可能性が指摘されている。

該本の最大の特徴は、複数の系統が混在する点、及び伝来の過程で発生した物理的な「綴じ誤り」にある。本文は、「幻」「早蕨」の2帖が河内本の系統であるのに対し、「蓬生」「螢」「横笛」の3帖は定家本（青表紙本）の系統に属するという、「混合本」の様相を呈する。

更に特筆すべきは、静嘉堂文庫蔵の「蓬生」と、前田家蔵（尊経閣文庫）の「鈴虫」との間に見られる本文の入れ替わりである。これらは、当初の数葉を除いて以降の本文が互いに混じり合っており、綴葉装の各一括を製本の際に誤って綴じ合わせたものと考えられている。この現象は、中世における写本の制作・修復過程を如実に物語る貴重な事象と言える。池田亀鑑編『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』では、略号「為」として採用。

【10】〔源氏物語花散里・柏木巻〕

尊経閣文庫所蔵。請求記号：27・古。〔鎌倉初期〕写・〔藤原定家〕筆。2冊。

題簽中央龍文薄茶色紙「花ちるさと（かしは木）」（縦10.2×横2.4cm）。

綴葉装。紺絹表紙（縦21.8×横14.2cm）。見返栗銀切箔散。本文行数：花散里：9-10行、柏木：8-10行。墨付丁数：花散里：5丁（全2括。[1]：3紙、[2]：2紙）、柏木：51丁

(全4括。[1]:7紙、[2]:8紙、[3]:5紙)。

処々に本文別筆による墨書紙片を貼付。極札(表)「はなちるさと外題者後柏原院御宸筆/京極黄門定家卿御真筆(印「琴山」)」。同包紙(朱書)「花ちるさと外題者後柏原院御宸筆二十六ノ二/京極黄門定家卿御真筆壹枚」。折紙「已上/源氏青表紙之内柏木卷一冊者京極/黄門定家卿御真跡/無粉者也但付墨/紙数五拾壹枚□之也/奥之勘物一面餘之/筆者可押知也/外題引哥六首/但付札也/後柏原院御宸筆/以彼卷可謂至宝/者也愚也之添状//□□多依御所望/證之已而/寛永四曆/五月十六日古筆了佐(花押)」。同包紙(朱書)「二十七ノ二壹通/古筆了佐折紙書出源氏者表紙之内/柏木卷一冊者」。三重箱に収む。箱書:内箱(蓋表)「花ちる里/かしわ木定家筆」、外箱(蓋表)「く花ちる里/かしわ木定家卿筆」。中箱蓋表に「定家卿筆/源氏(花ちる里/かしわ木)」と墨書紙片貼付、同蓋裏「源氏(花ちる里/柏木)定家卿筆二冊 [以上朱書]/由来無知 [以上墨書]」と記せる墨書紙箋貼付。

《解題》

藤原定家が校訂を施した『源氏物語』は、その表紙の色から「青表紙本」と称され、中世以降の標準本文となった。かつては全54帖を数えた定家自筆本も、現在真筆と確認されるのは「花散里」「行幸」「柏木」「早蕨」「若紫」の5帖のみである。中でも「花散里」「柏木」の2帖は加賀前田家伝来の至宝として現在は尊経閣文庫の所蔵に帰している。この2帖は、同一の箱に収められているが、この外箱には加賀藩三代藩主・前田利常(1594-1658)の筆で「花散里柏木定家卿筆」と題され、寛永4年(1627)付の古筆了佐による添状が付随する。

「花散里」は一面9行に整えられ、外題は後柏原天皇(1464-1526)の宸筆とされる。帖末に『奥入』を欠く。その筆致は定家の書風を忠実に模した「定家風」ではあるが、厳密な鑑定によれば定家自筆とは認めがたいとされる。しかし、古来定家筆として重んじられ、『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』において底本に採用される等、本文研究上の価値は極めて高い。

「柏木」は、一面の行数が9-11行。本帖の特徴は、前半部分に定家本人の真筆と見られる筆跡が認められる一方、後半及び巻末の「奥入」は定家風の筆致に転じる点にある。これは、定家自身の直接の筆に、家中の子女らによる代筆が加わった寄合書きの様態を示すものと考えられている。

これら2帖は、すべて定家自筆であるかについてはなお精査の余地を残しつつも、定家の監修・制作に関与した「青表紙本」を今に伝える貴重な伝本である。

【11】〔源氏物語椎本巻〕

尊経閣文庫所蔵。請求記号:92・古。〔鎌倉後期〕写。1冊。

綴葉装。改装後補支子色絹表紙(縦20.0×横19.1cm)。見返栗皮色地銀切箔野毛散。用紙楮紙打紙。本文行数11行。墨付丁数:47丁(全5括。[1]:4紙、[2]:5紙、[3]:5紙、[4]:5紙、[5]:5紙)。墨筆(本文同筆)にて書入を施す。擦消あり。

包紙上書「二条家為氏卿筆/中院御札アリ/椎本一冊/墨付四拾七枚(内片面壹枚)」。二重箱に収む。両箱書(蓋表)「原本椎本(二條為氏卿筆)一冊」。外箱底に「古名人部(朱印)/第九十二號/原本椎本/為氏卿筆」と記せる紙片貼付。

《解題》

加賀藩主前田家は、藤原定家自筆本をはじめとする多種多様な『源氏物語』の写本を所蔵しており、これらは総称して「前田本」と称される。明治時代以降、多くの旧大名家の蔵書が散逸する中、前田家は早くから「尊経閣文庫」を設立して組織的な保護に努めた。この英断により、定家自筆本を含む貴重な写本群は現在も嚴重に管理され、日本文学研究における至高の宝庫となっている。

該本は、鎌倉中期の公卿であり二条家の祖・二条為氏(1222-1286)の筆と伝えられる。近世前期の公家・歌人である中院通村(1588-1653)の鑑定によって為氏筆とされ、以降守り伝えられてきた。

本文中に一、二の誤写と目される箇所を含むが、全体としては定家本(青表紙本)系統の流れを汲んでいる。『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』において、略号「前」として採用され、定家本(青表紙本)の本文を校訂する際の重要な伝本の一に位置づけられている。

【12】〔源氏物語〕(存6巻)

尊経閣文庫所蔵。請求記号：113・古。〔鎌倉末期〕写。6冊。

結び綴本文共表紙(縦31.7×横25.2cm)。本文行数：11行。墨付丁数：[1]：総角：89丁、[2]：東屋：63丁、[3]：浮舟：68丁、[4]：蜻蛉：53丁、[5]：手習：64丁、[6]：夢浮橋：18丁。墨筆(本文同筆)に人物注記や見せ消ち・補入等の書入を施す。朱合点・朱句読点あり。

各札に極札を貼付。[1]：(表)「住吉神主津守國冬〈あけまき/大本一冊〉(印「琴山」)」（前遊紙）。[2]：(表)「西山僧慈寛法師〈あつま屋/大本一冊〉(印「琴山」)」。[3]：(表)「西山僧慈寛法師〈うきふね/大本一冊〉(印「琴山」)」。[4]：(表)「西山僧慈寛法師〈かけろふ/大本一冊〉(印「琴山」)」。[5]：(表)「西山僧慈寛法師〈てらなひ/大本一冊〉(印「琴山」)」。[6]：(表)「西山僧慈寛法師〈夢のうきはし/大本一冊〉(印「琴山」)」。二重箱に収む。両箱書(蓋表)「源氏物語六帖/あけまき/うきふね/かけろふ/てならひ/夢のうき橋古筆/筆者不知」(内箱は金泥筆)。外箱底に「冊物[以上朱書]/五十九番」「古名人部(朱印)/第百十三號/源氏物語零本/津守国冬等筆」と記せる紙片貼付。

《解題》

本写本は、鎌倉末期の書写と推定される一連の写本群である。伝称筆者は帖ごとに異なり、「総角」には住吉神社神主・津守国冬(1270-1320)、「東屋」から「夢浮橋」に至る各帖には「西山僧慈寛法師」とする極札が存する。

書誌的特徴として、本文及び装訂が、同じく河内本の代表格である「尾州家河内本」(以下、尾州家本)と酷似している点が挙げられる。このことから、尾州家本を含めたこれら諸本は、何らかの権力者や数寄者が同時期に諸家へ依嘱し、一斉に書写させた「兄弟本」のような関係にあった可能性が指摘されている。現在は卷子本に改装されたものも見受けられるが、綴じ穴の精査により、本来はすべて同様の大和綴であったことが判明している。

本文は、河内本系統に属する。『校異源氏物語』及び『源氏物語大成』において、略号「前」として採用されており、近年の『河内本源氏物語校異集成』においても重要な対校本として位置づけられている。

河内本のきわめて良質な写本として、定家本（青表紙本）が主流となる以前の享受を今に伝える資料である。

【13】〔源氏物語須磨卷附帚木卷残簡〕

鶴見大学図書館所蔵。請求記号：913.36/M/5-る-3。〔鎌倉後期〕写。1冊。

扉「二は、木々」。

綴葉装。表紙なし（縦17.7×横17.3cm）。用紙鳥の子。本文行数：帚木：9行、須磨：10行。墨付丁数：帚木：8丁（存1括5紙）、須磨：60丁（全4括。[1]：6紙、[2]：7紙、[3]：7紙、[4]：7紙）。須磨卷は墨筆にて見せ消ち・書入等を施し、朱筆にて合点を施す（朱墨本文同筆）。

帚木卷は1括のみ存し、須磨卷の第1括は帚木卷。前遊紙裏に極札（表）「冷泉殿〈為相卿/ひかる源氏〉一冊（黒印）」。箱書（蓋表）「二條家為定卿毫〈須磨卷/新式抄〉外題冷泉殿筆」。印記「總持学園/藏諸之印」（朱陽長方）。

《解題》

本帖は、鎌倉後期に書写されたと推定される『源氏物語』「須磨」の零本である。本来は「須磨」一帖からなる綴葉装の写本であったが、伝来の過程で「須磨」卷の第一括（巻頭部分）が失われたため、ほぼ同時代の別筆になる「帚木」卷の第一括（八丁）を補い、一冊とした特異な形態を有している。

帖頭の白紙裏には、古筆了佐による極札が貼付されており、伝称筆者は冷泉家の祖・冷泉為相（1263-1328）とされる。

「帚木」が冒頭から「いとかはらかなりいゑの」まで、「須磨」は「わかれはかうのみや」から末尾までを収める。本文はいずれも定家本（青表紙本）の系統に属するが、両卷ともに一部に独自異文が見られ注意を要する。

【14】〔源氏物語須磨卷〕

鶴見大学図書館所蔵。請求記号：913.36/M。〔鎌倉末期〕写。1冊。

題簽左肩金泥菊水画金霞引「須磨為定卿筆」。

綴葉装。改装後補薄萌黄色地草華模様織出表紙（縦15.8×横15.0cm）。本文行数10行。墨付丁数：56丁（全4括。[1]：8紙、[2]：8紙、[3]：10紙、[4]：6紙）。朱合点を施す。

箱蓋表中央に「越部局/松風」と記せる題簽貼付。「松風卷筆者」と記せる包紙あり。極札（表）「越部局〈俊成卿女/源氏物語松風卷壹帖〉」（雲母摺波濤模様紙）。箱書（蓋表）「二條家為定卿毫〈須磨卷/新式抄〉外題冷泉殿筆」。印記「總持学園/藏諸之印」（朱陽長方）「月明荘」（朱陽長方）。

《解題》

本帖は、鎌倉末期書写と推定される『源氏物語』「須磨」の零本。古筆鑑定により、二条派の正統を継ぐ二条為定（1293-1360）の筆と伝えられてきた。

本文は定家本（青表紙本）の系統に属し、池田本や三条西家本など主要な同系統諸本と共通する異文を有する。特筆すべきは、処々に見られる書入である。たとえば、藤壺の人物呼称を「薄雲」と記す等、源氏物語享受の痕跡を留めている。また、帖内に付された朱や墨の合点は、三条西家本等に見られる、定家が著した『源氏物語』の注釈書で

ある『奥入』の参照箇所とほぼ一致しており、当時の読書・研究の痕跡を鮮明に伝えている。

更に本帖の稀有な点は、後付の遊紙を利用して、室町初期の別筆により『新式抄抜書』が写されていることにある。これは二条良基撰の連歌の法則書『連歌新式(応安新式)』の抄出加注本として最古写本の一に数えられる。この筆跡が『源氏物語』本文に施された書入の一部と同一であることは、一人の所持者が『源氏物語』と『連歌』を並行して学んでいた実態を裏付ける。

【15】〔源氏物語須磨卷断簡〕

鶴見大学図書館所蔵。請求記号：913.36/M。〔鎌倉後期〕写。1葉。

断簡1葉(縦15.4×横15.1cm)。本文行数10-11行。

台紙(縦16.0×横15.6cm)に貼付。

《解題》

本断簡は、鎌倉後期の書写と推定される『源氏物語』「須磨」の一部である。古筆鑑定による極札を伴わず、伝称筆者も未詳であるが、その本文は全体として河内本系統の特徴を色濃く反映しており、処々に独自異文が見られる。また、一般的な河内本諸本に多く見られる朱の句読点を欠く点も特徴的である。これらの点から、本断簡は河内本系統の中でも主流から分かれた異本に位置づけられるか。

内容は、光源氏が須磨への下向を控え、最愛の紫上と別れを惜しむ抒情的な場面。中でも6行目の「かゝる世を／みはべるよりほかのことおもはずなる事／はなに事か思給へられん」という一節は、光源氏との別離に直面した紫上の、深く沈痛な決意を秘めた詞にあたる。

【16】〔源氏物語帚木卷〕

東洋大学附属図書館所蔵。請求記号：K913.36-M-35(貴32)。1冊。〔鎌倉中期〕写。

題簽中央雲霞金泥画「はゝき木」(縦10.5×横2.6cm)。

綴葉装。改装後補支子色地震模様金泥霞画絹表紙(縦15.3×横15.7cm)。見返金泥霞画金野毛切箔砂子散。用紙雲母引。本文行数10行。墨付丁数61丁(全4括。[1]:6紙、[2]:10紙、[3]:10紙、[4]:9紙)。朱合点あり。本文同筆にて見せ消ち・補入等の傍記あり。擦消・塗抹による抹消あり。

表紙に包を付す。表に「阿佛筆源氏物語/伏見宮安宮照子殿下明暦三年十一月廿六日/紀伊中納言光貞卿御降嫁之節御持返」と墨書。前遊紙に「東洋大学附属図書館」(単枠・朱)「東洋大学図書館蔵」(双枠)の押捺に続いて、墨書にて「貴三十二号」と記せる紙片を貼付。「昭和四十一年度三都古典連合会大入礼会」の札を付す。「源氏物語帚木一帖/傳阿佛尼筆鎌倉中期古写本/紀州徳川家伝来/参拾貳万八千九百八拾円也(東京/琳琅)」(「目録番号29」と印字)と墨書。印記「賜架書[以下不明]」(朱陽長方双枠)。

《解題》

本帖は、鎌倉中期の歌人・阿仏尼の筆と伝えられる『源氏物語』「帚木」の零本。かつて全五十四帖が揃っていた紀州徳川家旧蔵本(紀州家本)のうち、戦火を免れた唯一の残存本として知られる。

従来は徳川家康ゆかりの「駿河御譲本」とされてきたが、箱書の調査により、明暦3年(1657)に伏見宮家の安宮照子が紀州家へ降嫁した際の持参品であることが判明した。

明治以降、紀州家の「南葵文庫」に収蔵されていた該本は、昭和2年(1927)の売立により大半が英国人モーデの手に渡った。その後、戦時中の神戸大空襲によりモーデのコレクションと共に焼失したと考えられ、長らく「幻の写本」と称されてきた。しかし、当時司書を務めた高木文の手元に残されていた「帚木」一帖のみは奇跡的に難を逃れ、昭和41年(1966)、古書展を通じて東洋大学の所蔵となった。

本文は定家本(青表紙本)の系統に属し、その純度はきわめて高いとされる。石田穰二や久保木秀夫らによる近年の詳細な調査により、消失した紀州家本の全貌や本文の特異性を探る唯一の手がかりとして、重要な位置を占めている。

【17】〔源氏物語浮舟巻〕

蓬左文庫所蔵。請求記号：26417-108-63。〔鎌倉中期〕写。1冊。

綴葉装。改装後補砥粉色地蓮華唐草模様金織出表紙(縦16.4×横15.0cm)。見返銀切箔散。用紙鳥の子。本文行数10行。墨付丁数：95丁(全7括。[1]:5紙、[2]:7紙、[3]:7紙、[4]:8紙、[5]:7紙、[6]:7紙、[7]:9紙)。墨筆にて見せ消ち等の書入を施す(本文同筆)。

「極札」と記せる包紙に極札あり。極札(表)「中院重相〈為家卿/源氏うき舟の巻一巻〉(黒印)」。箱書(蓋表)右肩墨書「哥書源氏うき舟の巻」。同蓋裏に「心月菴/什器」(朱陽長方)「松浦家」(朱陽長方双枠)と印字せる紙片貼付。箱底に「哥書〈巻〉内■■■■」と墨書。印記「蓬左文庫」(朱陽方)。

【18】〔源氏物語竹河巻〕

蓬左文庫所蔵。請求記号：26417-108-64。〔鎌倉中期〕写。1冊。

題籤中央黄紙「たけ河〈匂兵部卿/ならひ二〉」(縦7.9×横5.1cm)。綴葉装。乳白色地金銀切箔砂子野毛散表紙(縦16.7×横15.7cm)。見返銀切箔散。用紙鳥の子。本文行数10行。墨付丁数：63丁(全5括。[1]:6紙、[2]:6紙、[3]:9紙、[4]:6紙、[5]:6紙)。墨筆にて人物注記・等の書入や見せ消ちを施す(本文同筆)。間々朱句読点・朱合点あり。

後遊紙に「すみつき六十三」と記せる墨書紙片貼付。箱題籤中央に「傳為家筆/源氏物語たけ河」とあり。箱下に「為家/御筆/源氏/たけ/河」とあり。印記「蓬左文庫」(朱陽方)。

【19】〔源氏物語総角巻〕

蓬左文庫所蔵。請求記号：26419-108-65。〔鎌倉初期〕写。1冊。

綴葉装。改装後補砥粉色地鹿松等丸文金織出表紙(縦16.9×横15.1cm)。見返金布目紙。本文行数10行。墨付丁数：103丁(全9括。[1]:6紙、[2]:6紙、[3]:6紙、[4]:6紙、[5]:6紙、[6]:6紙、[7]:6紙、[8]:6紙、[9]:6紙)。墨筆(本文同筆)にて振り仮名・見せ消ち・訂正書入等を施す。

後遊紙に「すみつき百三枚(楕円墨印)」と記せる墨書紙片貼付。極札と記せる包紙あり。極札(表)「源三位頼政卿〈総角一冊/あまたとしみゝなれ給〉(黒印)」、(裏)「六半本〈壬午〉四(朱印「神田道伴」)」。箱書(蓋表)「源三位頼政卿筆/源氏総角」。印記

「蓬左文庫」(朱陽方)。

【20】〔源氏物語松風卷〕

蓬左文庫所蔵。請求記号：26420-108-66。〔鎌倉初期〕写。1冊。

綴葉装。本文共表紙(縦15.4×横15.5cm)。本文行数9行。墨付丁数：45丁(全3括。[1]：8紙、[2]：9紙、[3]：9紙)。墨筆(本文同筆)にて補入・見せ消ち・振り仮名等を施す。

箱蓋表中央に「越部局/松風」と記せる題簽貼付。「松風卷筆者」と記せる包紙あり。極札(表)「越部局〈俊成卿女/源氏物語松風卷壹帖〉」(雲母摺波濤模様紙)。箱書(蓋表)「源三位頼政卿筆/源氏総角」。印記「蓬左文庫」(朱陽方)。

《解題》

名古屋市蓬左文庫が所蔵する本群(【17】～【20】)は、尾張徳川家に伝来した膨大な蔵書のうち、鎌倉期写本四帖(「松風」「竹河」「総角」「浮舟」)を指す。

これらは、伝称筆者及び本文系統が帖ごとに異なる混合本の様相を呈している。伝称筆者は「竹河」「浮舟」を藤原為家、「総角」を源頼政、「松風」を越部局とし、本文においても「総角」は定家本(青表紙本)系統、「浮舟」は河内本系統、残る二帖は別本群という複雑な構成を持つ。元から一組の写本であったのか、定かではない。

伝来については、江戸期には京都の公家・烏丸家に揃って蔵されており、当時は現在国立歴史民俗博物館が所蔵する「中山本」とも一組を成していたと見られている。中山本と同様、明治30年代に烏丸家を離れた後、平戸の松浦家を経て、大正末年頃に尾張徳川家の所有に帰し、現在の蓬左文庫に収蔵されるに至った。

『源氏物語別本集成』には「松風」「総角」「浮舟」、また『河内本源氏物語校異集成』には「竹河」が採用されており、その多様な本文の性格から、諸校本において重要な地位を占めている。

3. 和漢古書における書誌記述の検討と課題

前節で提示した『源氏物語』鎌倉期写本を対象とする解題目録の作成過程を踏まえ、本節では和漢古書の書誌記述における諸問題について検討を加える。書誌的調査において、判定に困難を伴う事項を中心に論述を進めたい。

(1) 書写年代の推定とその依拠資料

第一の課題は、書写年代の推定である。一般に、平安期に成立した作り物語の写本において、書写当時の事情を記した「奥書」を備える例は少ない。『源氏物語』の場合は他の物語作品に比して比較的奥書を伴う例が見受けられる。しかし実際には、現存する鎌倉期写本の多くは零本又は残欠本であり、奥書が失われている場合が殆どである。したがって、これら欠落の多い写本の書写年代を特定することは、きわめて困難な作業となる。

通常、書写年代の推定には、当該写本の紙質・筆跡・墨色等といった形態的特徴を総合的に勘案する必要がある。近時、紙質調査において光学機器等を用いた科学的手法が導入されつつあるが、網羅的な目録記述における現実的な調査手法としては、未だ一般化の途上にあると言わざるを得ない。

このような現状の中、本稿の調査を通じて確認された有効な手法の一つに、古筆鑑定家による「極札」及び「極書」の活用がある。安土桃山期から江戸期にかけて、古筆了佐を家祖とする古筆家等の古筆鑑定家は、平安・鎌倉期の古筆資料を対象に真贋判定を行い、伝称筆者を同定した鑑定書を作成してきた。これらにおける個別の筆者同定（「伝〇〇筆」）の真偽については、再考を要する場合も少なくない。しかし、膨大な古筆資料に接してきた鑑定家の知見は、少なくとも書写年代の「時代比定」という点においては、現代の書誌学的水準に照らしても一定の蓋然性を有している。

たとえば「伝西行筆本」と比定されている写本であれば、伝称筆者の生没年（1118-1190）を目安とすることで、書写年代が平安末期から鎌倉初期にかけてであることを、おおそ推察することができる。このように、古筆鑑定の所産を時代比定の補助的な基準として用いることは、奥書を持たない物語写本、ひいては鎌倉期写本の書誌記述における、一つの参考となり得るものと考えらる。

今回調査対象とした伝本の多くは、極札又は極書が付されており、それを参考にしつつ、書写年代を推定した。ただし、極札や極書が存しない資料もあるため、上記と異なる観点が求められる。

（2）歌書類を指標とした書写年代の推定

次なる課題は、伝称筆者の生没年に基づいて物語写本の年代推定を行う際、隣接する歌書類との間で生じ得る年代比定の不均衡をいかに解消するかという点にある。先述の通り、物語写本の多くは奥書を持たず、推測の域を出ない資料である。一方で歌集・歌合・歌学書といった歌書類には、書写年次・書写者等を明記した奥書を有するものが数多く現存している。この書写年次の精確さという点において、同時代の資料群を俯瞰する際、著作の種別（ここでは物語と歌書）によって書写年代の判断にズレが生じる要因となりかねない。

この問題に対する方策として、古筆鑑定における伝称筆者の大半が鎌倉期の主要な歌人であるという事実に着目したい。和古書において、写本の存伝数が最も豊富であり、かつ奥書によって書写年次が確定しているのは歌書類である。したがって、この精確な書写年次を有する歌書類を基準として、その年代比定を物語写本に援用させることで、より整合性の取れた推定が可能となる。

具体的には、中世歌壇を主導した御子左家3代の活動時期に基づいた時代区分の導入を提唱したい。鎌倉期は約150年という限られた期間ではあるが、和歌史の変遷に即して以下のように画期を設けることで、歌書類との年代記述の統一が図られる。

- ・鎌倉前期：藤原定家の活動期を基準とする。前期の中でも比較的早いと判断される資料は「初期」と位置づける。
- ・鎌倉中期：藤原為家の活動期を基準とする。為家は鎌倉中期の歌人である上に、伝称筆者とされることも多い。よって、これを中期の中心に据える。
- ・鎌倉後期：二条為氏、および京極為兼や冷泉為相ら各後継者の時代を基準とする。後期の中でも更に時代が下る資料については「末期」とする。

このように、確定年次を豊富に持つ歌書類を基に物語写本の記述に援用させることで、推定年代の客観性を担保するための一つの手段と捉えられる。とりわけ、鎌倉期写本の

多くは、当時の歌人らによって書写されたものである。したがって『源氏物語』鎌倉期写本における年代推定には有効であろう。

(3) 装訂の原態と改装後補に関する書誌学的検討

また、鎌倉期写本の書誌記述において、表紙が「原装」であるか、後世の手による「改装後補」であるかの判別は、当該資料を把握する上で看過できない課題である。この識別における最も簡便かつ有効な指標は、表紙の材質及び本文との構造的連続性に求められる。

① 原装表紙の判定基準

まず、本文と同一の料紙を用いて表紙を仕立てる「本文共表紙」の形態を採る場合、それは綴葉装の構造に由来するものであり、原装である蓋然性が高い。加えて、共表紙ではなくとも、紙表紙の場合、原装が維持されている事例は比較的好く認められる。

ただし、判定に際しては、綴葉装の綴じ穴の位置や状態を詳細に観察しなければならない。当初の綴じ位置と現状の装訂に不整合や改変の痕跡がないか等、装訂の物理的構造そのものを精査し、慎重に帰納的な判断を下す必要がある。

② 改装表紙の識別と時代比定

一方、絹布を用いた表紙については、『源氏物語』の鎌倉期写本においてこれを原装とする確証的な事例は見出しがたい。したがって、これらは後世の修補に際して改装された可能性が考慮される。

事実、今回の調査対象となった鎌倉期写本のうち、改装が認められる事例の多くは、金欄表紙又は緞子表紙のものであった。そこに織り出された意匠や文様の様態を精査すれば、それらが後世の美意識を反映して改められたものと見ることができる。鎌倉期写本が数世紀にわたり原装のままで伝存することは稀であり、伝来の過程で補修が加えられることはあり得る。とりわけ、その時代の公家・大名等の手に渡る際、表紙の付け替えが行われることは考えられよう。

以上の点から、当該写本の原態を考察する上では、表紙の材質が「紙」であるか「布」であるかという素材の差異にも着目し、それを起点として装訂の変遷を推定する手法が、書誌記述における不可欠な要素の一つとなると思われる。

(4) 綴葉装の構造的特性と書誌記述における新視点

本調査の対象とした『源氏物語』の鎌倉期写本は、そのすべてが綴葉装（別称・列帖装）の形態を採るものであった。この装訂は、数枚の紙を重ねて二つ折りとした「括（くくり）」（又は「折（おり）」）を単位とし、これらを順次重ね合わせ、折り目部分の穿孔に糸を通して連結する構造を持つ。本項では、この物理的構造が本文の書承に与える影響を考察し、目録記述における必要事項を提案したい。

① 構造的脆弱性と本文への影響

綴葉装における最大の課題は、綴じ糸の経年劣化による断絶のリスクである。特に、

一冊の丁数（紙数）が増大し、それに伴って括の数が累積するほど、綴じ糸への負荷は増し、冊子本としての体裁を維持することが困難となる。こうした構造的脆弱性は、必然的に「落丁」および「錯簡」という二つの問題を引き起こす。

- ・落丁：綴じ糸の切断により、特定の紙が脱落し失われる事象である。これにより当該箇所本文が物理的に失われるため、校訂作業において他本による復元を余儀なくされる。
- ・錯簡：綴じ糸の切断後、再び綴じる際に、紙の順序や重なりが本来の形とは異なる状態で固定される事象である。錯簡の様態は多岐に亘り、紙の前後入れ替わり、二つ折りの反転（外折れ・内折れの逆転）、あるいは括単位での順序の入れ替わり等が挙げられる。

②括（折）と紙数の記述

前述した改装後補が施された写本においては、上記の落丁や錯簡が潜在している可能性がある。しかし、従来の解題や目録記述において、綴葉装の内部構造にまで踏み込んだ例は稀であり、これらは実地調査を通じてしか得られない情報であった。

今後の書誌記述においては、単なる丁数の総計に留まらず、「総括数」及び「各括を構成する紙数」を明記すべきであると考え。たとえば「10丁（第1括5紙）、8丁（第2括4紙）……」といった具体的な単位の記述を導入することで、影印やデジタルアーカイブ、紙焼資料を活用した遠隔地からの研究においても、いかにして落丁や錯簡が生じたのかを論理的に解明する手がかりとなる。

以上のように、綴葉装という物理的情報を記述に反映させることは、単なる外形の記録ではなく、鎌倉期写本が辿った変容の歴史を可視化することができる。と考える。

4. おわりに

本稿では、鎌倉期における『源氏物語』写本の解題目録作成を通じ、和漢古書の書誌記述における諸問題、特に客観的な判断手法の確立とその記述の在り方について検討を加えてきた。

第一に、書写年代の推定において、古筆鑑定家による極札又は極書が付属している場合には、それが時代推定の参考となる。そして、そうした付属物を持たない場合には、奥書を持たない物語写本の特性を鑑み、奥書を豊富に持つ歌書類を比較基準とした手法を示した。これは、極札（極書）に記される鎌倉期写本の書写者が、同時期の主要な歌人に比定される点から着想を得たものである。また、物語写本は奥書を持たないため、書写年代の精確さは、奥書を持つ歌書には及ぶべくもない。したがって、こうした著作の種別（ここでは物語と歌書）の間に生じる年代推定の不均衡を解消するために、御子左家3代（定家・為家、及びその後継者）の活動期を鎌倉前期・中期・後期の時代区分に導入することを提唱した。

第二に、装訂の変遷に関する検討では、表紙の材質（紙か絹布か）及び本文との構造的連続性に着目した。これにより、原装と後世の修補による改装を識別する基準を明確化し、特に後代の意匠が施された改装後補表紙と区別することで、鎌倉期写本が本来有していた形態を考証する重要性を指摘した。

第三に、綴葉装（列帖装）という物理的構造が孕む脆弱性、すなわち落丁や錯簡のリスクを記述に反映させる必要性を説いた。従来の総丁数のみの記述から一步踏み込み、「括（折）」単位の紙数を明記することで、デジタルアーカイブ等を通じた遠隔研究においても、物理的な要因による本文の欠落を解明するための要素となる。

今後の課題としては、本稿で提示した判断手法が、室町期以降の写本や他の作り物語に有効なものであるかを検証していく必要がある。また、紙質の科学的分析結果をいかに目録記述へと還元・統合していくかについても、検討を要する。

鎌倉期から現代へと長い時間をかけ伝えられてきた写本は、単なるテキストの容器ではなく、それ自体が変容の歴史を宿した文化史的遺産である。本稿で考察したような、精密な書誌記述の積み重ねが、今後の『源氏物語』研究、ひいては古典籍の体系的な調査・研究に寄与することを希求して、本稿の結びとしたい。

参考文献

■書誌学

藤井隆『日本古典書誌学総説』（和泉書院、1991年）

阿部隆一『阿部隆一遺稿集 第2・3巻 解題篇』（汲古書院、1985年）

堀川貴司『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読む』（勉誠出版、2010年）

佐々木孝浩『日本古典書誌学論』（笠間書院、2016年）

■源氏物語

山岸徳平『源氏物語研究序説 河内本』（岩波書店、1936年）

今井源衛『源氏物語の研究』（未来社、1962年）

池田亀鑑『源氏物語大成 資料篇』（普及版、中央公論社、1985年）

阿部秋生『源氏物語の本文』（岩波書店、1986年）

池田利夫『源氏物語の文献学的研究序説』（笠間書院、1988年）

伊藤鉄也『源氏物語本文の研究』（おうふう、2002年）

池田利夫『源氏物語回廊』（笠間書院、2009年）

大内英範『源氏物語鎌倉期写本の研究』（おうふう、2010年）

岡寫偉久子『源氏物語の書誌学的研究』（おうふう、2010年）

上原作和『光源氏物語伝来史』（武蔵野書院、2011年）

・単著論文

徳満澄雄「鹿児島大学附属図書館蔵 玉里文庫本古筆源氏物語について」（『語文研究』第23号、1967年）

武藤那賀子「玉里文庫本古筆源氏物語（鹿児島大学附属図書館蔵）再考（1・2）」（『国際文化学部論集』第19巻第2・3号、2018年10・12月）